

社説 『ジェームズ・ハドリー・チェイス作』

新しい読者のために、直ぐに作品（実の作者、グレーム・グリーンは意図的に陰に隠れ続けました）と公式の作者であるジェームズ・ハドリー・チェイスを区別することで、混乱を避けたいと思います。

前の会報3号の中で、20世紀で最も成功した文学詐欺の機能を細かく分析しました。しかし、この作者の作品そのものを分析する必要性がありました。

批評家達が何かを発見することを恐れて意図的に無視したこの重要な作品があまりにも早く忘れられることを避けるため、ジュリアン・デュプレがこの号の中で作品について話しています。

私からは、ルネ・ブラバゾン・レイモンド、別名ジェームズ・ハドリー・チェイスが担った役割だけ述べたいと思います。何故なら、彼は自分の文学的能力は公にしなかったものの、目立ってはいけない、しかも金儲け主義な人気作家という最も感じの悪い役を、企ての変遷、激動の期間、人生の浮き沈みにもかかわらず、40年以上もの間もっともらしく、さらには万人が認めるほどうまく演じた彼の才能を尊敬すべきだからです。

ルネ・ブラバゾン・レイモンドを選択して大当たりでした。彼は役に完璧に適応した精神だけでなく、容姿も備えていました。元イギリス空軍の戦隊リーダーで、戦争に関する短い記録（"The Mirror in Room 22"（『22号室の鏡』）、5ページ）を書いたアマチュア作家で、いかにもイギリス人っぽい髭（公式の写真と推理小説コレクション「セリ・ノワール」の裏表紙でこの髭はとても引き立てられています）が写真に理想的です。マルセル・デュアメルによってフランスに紹介され、フレデリック・ダールと彼の手下であるフレデリック・ヴァルマンの助力のおかげで、彼は自分のイメージを認めさせ、詮索好きな人々の意欲をそぐための丁度良い距離を見つけたのです。

共謀者かつ創造主に様々な問題をおこし、仲違いが時期尚早かつ困難な別れにつながってしまったヴァルマンやアジャールとはかけ離れたルネ・ブラバゾン・レイモンドに、迷うこと無く、現代文学界の最優秀ダミー賞を与えたいと思います。お見事、ルネ・ブラバゾン・レイモンド！

P. S. 前号で読者に出したお題に見事に成功した方がおります！アレキサンドル・クレマンが、"Assez de boniments"（『でたらめはもうたくさん』）とその作者について詳しい情報を提供してくれ、もっと手に入り易い再版（"Ce bon Monsieur Fred"（『この親切なフレッド氏』）というタイトル）が存在することを知らせてくれ、またも良い小説には面白い話が付き物だということを証明してくれました。

<http://alexandre.clement.over-blog.com/article-fini-les-boniments-jean-louis-martin-1944-87358739.html>

ティエリー・カゾン
（当会報 "Les Polarophiles Tranquilles"（『物静かな推理小説ファン』）会長）

『ジェームズ・ハドリー・チェイスの蘭』 ジュリアン・デュプレ

1、どのようにフランスで推理小説が葬られているか

10年近く前からフランスでは推理小説が大ブームです。文芸評論家も読者も、北欧や英語圏の最新鋭の作家の推理小説を熱心に読みあさり、名の知れていない出版社が次々に「ノワール」コレクションを発刊しています。今日では、あまりにもいろいろな作品を出版することで、このジャンルに読者が飽き飽きしてしまうのでは、と心配する声も聞かれます（心配して当然です）。素人作家が、新しいスティエグ・ラーソンやジェームズ・エルロイではないかと期待するのは確かに滑稽です。このような問題点はあるものの、推理小説-現代推理小説-が人気なことは確かです。

ただ、それが問題なのです。ただの人気でしかないのです。明日にでもブームが終わってしまえば、他のジャンルに興味を持ち始める批評家達と、推理小説ブームに飽きた読者達は、波のように遠くに引いていきます。その後、推理小説の専門家達のサークルに陥るしか無いのです。そして彼らが真っ先に行うのは、彼らの主題を、ジャンルを把握出来ない一般的な読者の侵害から守るために、非常線を張ることです。それが、このブームが生んだ大勢の作者達を忘れさせる一番の方法なのです。

私達は、この悪循環を良く知っています。一世紀前から続いているからです。推理小説が売り出され、ブームになり、忘れられ、専門家に解剖されるだけになるのは、今に始まったことではありません。過去にもフーダニット、戦後の暗黒小説、フランスのネオ・ポラールに次々と群衆が集まりましたが、毎回散らばって行き、彼らが戻ってくることはありませんでした。何故なら、大成功は成功を台無しにし、ブームを利用して、自分たちが座っている枝をのこぎりで挽くようなご都合主義者が常にいるからです。（作家、評論家、出版社と、どこにでも存在します。）

推理小説は、他の文学ジャンルと違い、継続性がありません。連続した波で進みますが、新しい波が前の波と一緒に築かれたクオリティーを飲み込むのです。そのため、一番人気のある作家が、10年後には、専門家のアンソロジーに記載された、おぼろげな名前となるのです。その作者が才能を持っている場合、不平等だと感じます。ごく普通の読者の誰が、見事な作品『センチュリアン』（1971年）、『クワイヤボーイズ』（1975年）と『闇にいる悪魔 - 高校教師殺人事件』（1987年）を書いた素晴らしい作家、ジョゼフ・ウォンボーを覚えているのでしょうか。80年代には、（少なくともフランスでは）推理小説に関する名高いイベントに招待され、彼の作品はベストセラー並に売れていました。10年後には、すっかり忘れ去られていました。2000年代後半には、ウォンボーの最新作がリヴァージュ社から出版され、ひっそりとカムバックをします。それでは、彼の昔のヒット作は再版され、新しい年代の読者達に勧められているのでしょうか。もちろん、そんなわけがありません。それでこのような不条理な状況に陥るのです。1970年から2000年にかけて20作以上を生み出した推理小説家（しかもエルロイと同様のテーマを扱い、彼よりも遥かに上の作家です）にも関わらず、最新の4、5作しか知られていないのです！これらの作品さえ、また新しい推理小説のブームによって葬られるでしょう。どちらにしろ、忘れられる宿命です。

推理小説に欠くこと、欠いて来たことは以下です。ただのブームとしてではなく、系統を考えた（推理小説はいつも過去の例を基にし、それを上回ろうとするからです）深い研究です。基本的な研究は、専門家のクロード・メプレドゥ、ジャン＝ジャック・シュルレ、ジャック・ボドゥ、ミッシェル・ルブランによって行われました。しかし、彼らの研究はアンソロジーや調査目録にすぎないため、全く不十分です¹。その中で行われている文学的研究は（研究が実際になされている場合は）あまりにもレベルが低く、専門的知識は空回りしています。領地を君臨する城主のように、推理小説を支配していると確信した専門家達は、SF小説の専門家達と同じミスをしたのです。彼らの後を継ぎ、もしくは彼らを上回るような弟子を育成しなかったため、後継者無くして年を老うことになったのです。

もちろん、彼らが作成したアンソロジーや辞書が無駄なわけではありません。新しい読者が推理小説と呼ばれる迷路の中で目印を見つける役に立つでしょう²。推理小説は文学ジャンルの中で一番定義付けされたジャンルですが、様々な世界が存在し、それぞれ違った才能を持った作者達が活躍しています。専門家達が、深く、イデオロギー的な偏見のない研究を行わなかったため、この豊かさを伝えることが出来なかったのです。ところが、推理小説にはこのような研究が必要なのです。過去から題材などを引き出し、不当に忘れられた作者達にチャンスを与え、古典的名作が存在することを思い出させなければなりません！しかし推理小説は、皆の想像力が欠けているせいで、再発見されるのを待ちながら、細々と生き残っているのです。

これらのほうっておかれた古典的名作をささやかな規模で再発見するために、"Les Polarophiles Tranquilles"（『物静かな推理小説ファン』）は10年近く前から活動しています。我々は、フレデリック・ダール、ドロレス・ヒッチェンズ、ジョルジュ・シムノン、S=A・ステーマンほどの大作家達に関して何もコメントをしないということは、不当で非常識だと考えます。その中でも、ジェームズ・ハドリー・チェイスは避けて通れないのです・・・

2、チェイス：ファーストクラスの葬式

他の誰よりも推理小説の古典的名作の冠がふさわしい作者がいるとすれば、それはジェームズ・ハドリー・チェイスです。彼のことを全く知らない素人の読者は、彼がデビュー作『ミス・ブランディッシュの蘭』（1939年から1500万部の売り上げ）で大成功した作家とみなすでしょう。彼の文学的キャリアはとても長く（1939年～1983年）、途切れることの無い成功を収めました。90作以上を生み出した幸せな作者で、20世紀最大の推理小説家の一人です。

特に、ミステリー小説と似通った推理小説の中で、新しいタイプのバイオレンス-冷酷で、無動機で、無理矢理社会的釈明を付けること無く、ユーモアによって和らげたりせず、ただ人間の逸脱としか説明出来ないバイオレンス-の発明者です。ジェームズ・エルロワが

¹ この網羅的な本の中で最も人気があるのは、2008年に発刊されたクロード・メプレドゥの『推理小説辞典』です。しかしながら、扱われている作者に関し学ぶことはとても少なく、彼らの推理小説世界の分析はとても簡素で、引用も稀です。

² 私もこれらの多数の著作のおかげで、推理小説文化について学んだことを述べなければ不当でしょう。しかし、そこで学んだ範囲や教訓からとつくの昔に解放され、テキストや作者を自己流に知覚し判断する能力を備えたことも述べなければなりません。

同様の成功をどのように扱ったかはご存知でしょう。当時評論家達を引きつらせた³この悪徳こそが、チェイス作品の生存に一番貢献したのです。セルジュ・ブリュソロやルネ・フレニのような作家が、今日もチェイスを、ダシール・ハメットやレイモンド・チャンドラーよりも優れた作家だと尊敬する理由でもあります。とにかく、チェイスは推理小説の巨匠であり、大学教授や文芸評論家が優先的に研究するべき作家でした。しかし、彼らは、この作家をあっさりと放棄してしまいます。チェイスに関する一番とっつきやすい研究は、専門辞典の中の手短な要約にすぎません。唯一妥当なエッセイ、ロベール・ドゥルーズの著作、"A la poursuite de James Hadley Chase"（『ジェームズ・ハドレー・チェイスを追って』）さえ、多くの暗号化された暗示⁴のせいで、半分しか理解出来ません。ファンジンや専門の雑誌に関しては、1990年に"Les Amis du Crime"（『犯罪の友』）がチェイスに捧げた、情報豊富なファイルをお勧めしますが、かなり見つかりにくいのです。インターネットがある、とおっしゃりたいでしょう。しかし、検索すれば一目でジェームズ・ハドレー・チェイスに関する確実な研究や情報が全く無いことが分かります。

このような欠陥に唾然とさせられます。多数の作品を通して一貫した世界を築く勇気を持っていた（しかも世界中の何百万人もの読者の賛同を受けた！）男が、なぜ彼を擁護するはずだった人々、特に出版社と批評家にすっかり見捨てられたのでしょうか。

なぜ『ミス・ブランディッシュの蘭』で、チャンドラーやハメットより根本的に推理小説を変革した作家を無視したのでしょうか⁵。彼の作品のフランスでの出版社、有名なガリマール社が、時と共に人数は減ったものの、チェイスの読者は世代を超えて存在しているにもかかわらず、なぜほんの少しずつの再版をするのでしょうか。

陰謀だとは言いません。「チェイスのケース」は、無知と違和感を生み出します。彼は推理小説を、文学としてではなく、大事な収入源となるために大衆的な人気を得ることを意識しながら、幾つかの強迫観念やはっきりしたテーマを伝える媒体として初めて使用した作家です。しかし、推理小説の純粹主義者は、チェイスはお金だけを求めていると考え、彼の2つの目的のうち、金儲けのほうだけを記憶に留めたのです。それが意気消沈させるほどの誤解を生み、今日もこのイギリス人作家のイメージはその被害を被っています。チェイスは、商業作家、セリ・ノワールの一目を引く「輝く星」、疑わしいミッキー・スピレインと同等のB級作家と扱われています。優れた推理小説の評論家、ジャン＝パトリック・マンシェットでさえ彼らを同等に扱い、チェイスを「下品な商人」⁶と呼びます。彼

³ここで、当時の批評家に意気をくじかれることなく、セリ・ノワールにチェイスを出版させ、コレクションを成功させたマルセル・デュアメルにオマージュを捧げたいと思います。そのためには勇気と人並み離れた直感力が必要だったことでしょう。戦後のチェイスに関する批評がどのようなだったか知りたい方は、才能を金のために売る「タクシー・ボーイ」に対する嫌悪をはっきりと表しているトマ・ナルスジャックのエッセイ、"La fin d'un bluff"（『はったりの終わり』）（1949）を参照して下さい。

⁴その後解説されました。ロベール・ドゥルーズは、ダミーであるルネ・ブラバゾン・レイモンドを使ってジェームズ・ハドレー・チェイスの全作品を実際に行ったのはグレアム・グリーンだと言いたかったのです。この著作の発行のせいで、ロマン・ガリー/エミール・アジャール事件の後、ペンネームや名義人の話に敏感になっていた文壇から彼は追放されてしまいました。

⁵いつもチェイスを軽蔑していた批評家、ジャン＝パトリック・マンシェットでさえ、『ミス・ブランディッシュの蘭』の重要性をいやいや認めています：「けして傑作ではないが、道標であろう。」（"SN Story, premier épisode"（『SN ストーリー、第1エピソード』））、"Chroniques"（『時評集』）、リヴァージュ/ノワール、488号、2003年、267ページ）

⁶再度、リヴァージュ社によってまとめられた、マンシェットの"Chroniques"（『時評集』）の記事を参照して下さい。（引用には、2003年に出版されたリヴァージュ/ノワール コレクションを利用。）一つ例を挙げます：「セリ・ノワールは、ハードボイルド小説に絵になる外見だけを借用したイギリス人チェイネイとハ

によれば、この日和見主義のイギリス人は、流行のスタイルを卑しく悪用する者で、残忍かつサディスティックなスタイルが流行の時はそのように、暴力が流行らなくなった時は、教訓的で清潔なものを書くのです。ネオ・ポラールの法王、ジャンルを良く知る熟練の玄人からチェイスがこのような呼び方をされるとは驚きです。それにしたって、作者が文学的職業とお金を稼ぎたいという野心を混同してはいけないと禁止されているわけではありません！フランスの知識階級が求めて止まないセリーヌの『夜の果てへの旅』は、20世紀の鍵となった作品でありながら、作者が緻密に計算して作った商業的成功ではないですか！セリーヌの文通、ガリマール社へ原稿を見せた際の手紙が証言します⁷。チェイスに同じような計算をしたことを責められるでしょうか。自分の才能を考慮し、文学的にも財政的にも最適なジャンルを考慮したことを。

「まさにそうなのです！」と非難役が声を上げます。「先ほどからあなたがべらべらと話しているその文学的世界を見てみましょう。どの本を見ても、いつも同じサディスティックな殺人犯、絶対権力を持つ大金持ち、貪欲な女に操られる可哀想な男達が出てきます。あなたの好きなチェイスは、想像力が無く、ヒットする本のメソッドをうまく使用しているのです。」そしてジャン＝パトリック・マンシュットが付け加えます。「多作で巧妙なハドリー・チェイスは、野菜ミルを平静に回し、5つか6つの不変な形式を絶えず大量に再生産しているだけです。⁸」後に、チェイスの世界がどれだけ豊かで、「形式」にではなく、いつも異なった雰囲気の中で繰り返される「モチーフ」や「テーマ」に依存していることをお見せします。これらの「モチーフ」や「テーマ」は、チェイスの世界を貧弱にするどころか、全作品の一貫性、商業作家の個性を保ちながら、幅広い分野での活躍を可能にするのです。

それだけではありません。ジェームズ・ハドリー・チェイスの人物像も影響しています。デビュー当時から、文壇は彼に対して批判的でした。何故なら、『ミス・ブランディッシュの蘭』の暴力描写は40年程進んでおり、彼は成功を収め（これは許されないミスです）、幾つかの行き当たりばったりの試み（レイモンド・マーシャル、ジェームズ＝P・ドハーティ、アンブローズ・グラントというペンネームで）の後、見事にキャリア設計をし、純粋な推理小説だけではなく他のジャンルにも適応出来たからです。しかし、フランスの批評家達を一番狼狽させたのは、人間としてのチェイスの消去です。「彼について、少ししか知らない」というのは曲言法です。チェイスをインタビューしたいと考えた記者達は、透明で近寄れない謎の男に遭遇しました。撒かれそうになりながらも大作家に近付くことが出来た数少ない記者は、ルネ・ブラバゾン・レイモンという、けちけちと少ない言葉を発するだけの、恥ずかしがり屋の大きな髭男に会いました。インタビューの結果にもがっかりです。チェイスは作品に登場させているアメリカもアメリカ人も好きではありませんでした。また、彼自身の作品を評価しておらず、最新作の筋を忘れる程です！お金を儲けるために書いており、自分を作家とみなしていませんでした。彼のバイオグラフィーも簡潔なものでした（本屋の店員、戦時中は飛行機のパイロット、それ以外は確認出来ない逸話ばかり）。ルネ・ブラバゾン・レイモンはいかにもダミーでしたが、チェイスの死後、出版社も批評家も、フランスの文壇でよく行われていることを暴露したくなかったようで

ドリー・チェイスというまがい物をつかい、人目を引く方法でコレクションを開始しました。」（267ページ）マンシュットは、その「絵になる外見」がどのようなテーマを覆っているか考えたことがあるのでしょうか。

⁷その後、セリーヌが、ルイ・ギュー、ウジェーヌ・ダビ、アンリ・プライユ等当時流行っていた民衆主義の作家達に関心を持っていたことが分かりました。民衆主義の大始祖は、シャルル＝ルイ・フィリップと彼の著作『ビュビュ・ド・モンパルナス』（1901）です。

⁸ "Mr John D., artisan"（『ジョン・D氏、職人』）、"Chroniques"（『時評集』）、前掲書、246ページ

す（少しでも真剣な文学的分析が行われていれば、すぐにわかったことでしょう）。しかし、1981年のロマン・ガリー/エミール・アジャール事件の暴露のせいで、文壇は信用を失っています。10年間、ガリーは年老いた「伝統的な」作家と呼ばれ、彼の作品の評価は落ち、それに比べ、チェイスのように謎に包まれつつ、顔は知られていたアジャールの作品は、新しく大胆だと称賛されていました⁹。パリの文壇がすっかり騙されたのです。このような洞察力の欠如が再度あってはいけません。そのせいでチェイスの作品は非難されたのです。どちらにしろ、チェイスはフランスでしか人気がなかったため、外国の推理小説好きが、突然この厄介な問題を提起する（本当に問題があればですが）リスクはほとんどありませんでした。当時の状況は以下の通りです。推理小説の古典的名作群は、その面倒を見なければならないはずの人々によって、意図的に放置されます。

3、しかし死体はピンピンしています・・・

つまらない仕事をせさせとやる作家であれば、この沈黙も軽蔑も理解出来ます。推理小説は商業的なジャンルなため、このような作家がたくさんいるのです。しかし、どれでも良いので、チェイスの作品1冊を読むだけで、カーター・ブラウンやピーター・チェイニーとは違い、ハーラン・コーベンともかけ離れていることがわかります！物語も登場人物も興味をそそり、文体は雑になること無く簡潔です。制御された数々の展開が猛スピードで連鎖されるだけでなく、純粋な娯楽作品の裏に、適切な社会的および心理的背景を描いているのです。彼の本はいずれも時の試練に耐えています。何故なら、いずれの作品も、多くの推理小説を近い将来に理解不能にしてしまう社会的設定の代わりに、一定の人間観を描いているからです¹⁰。チェイス作品のなかではいまいちな"**So What Happens to Me?**"（『自分に何が起きているのか？』）（1973）でさえ、（90作品もあれば、どうしてもインスピレーションのレベルは不均等です）読者は作者の才能、シーンのカット割り、筋の路線に引きつけられます。また、社会的不適応者で初老のベトナム戦争のベテラン、バーニー・オルソンの深く掘り下げられた人物像に心を動かされます。彼は、人生の全てであった軍に見捨てられ、元兵隊の明晰さでチャンスは少ないとわかりながらも、最新の飛行機を盗むことで、息を吹き返そうとします。同様に、"**Not My Thing**"（『俺には関係ない』）（1983）ほど単純なプロットさえ、アリストテレス・オナシスをモデルにした、誰も（彼の妻でさえ）抵抗出来ない億万長者の卑劣漢、ジャミソンがあまりにもうまく描けているため、納得させられます。チェイスは悪役をうまく描きます。彼は、黄昏の英雄に力を注ぎ、輪郭を強調しすぎることなく（プロットのためにはこのようであればなりません）彼らにもっともらしい心理的深みを出すことも出来ます。これは、B級の作家に出来ることでしょうか。

⁹それは、ロマン・ガリーのいとこの息子、ポール・パヴロヴィッチの顔だったのです！ガリー/アジャールの共謀は、1981年にテレビ番組、アポストロフ（第291エピソード）で明かされました。ついでに言えば、司会者のベルナルド・ピヴォが、本当に困惑した様子で、さらには嫌悪感を抱いたように、この文学的結合について話すのです。「名前に関する詐欺」、「文学的詐欺」、「文学的創作が極端になると、滑稽で劇的な奇行をさせてしまうのです」・・・ピヴォはこのような毒舌的で道徳的な表現を使い、侮辱されたパリの文壇の恨みをスポークスマンとして発言したのです。

¹⁰社会的構造を使って人間性を説明したり、この構造の激変が償いに繋がったと説明するのは、今や時代遅れです。そのため70年代のネオ・ポラールがフランスではすっかり忘れられ、そのスター作家の大半（ジャン＝パトリック・マンシュット、ジャン・ヴォートラン、フレデリック＝H・ファジャルディ等）は、文壇から去ってしまったか、一般小説に分野を転換しました。

チェイスは推理小説の帝王になるための全ての切り札を持っていました。今まで見てきたように、慎重な儲け主義者（お金目当てという意図を全く隠しませんでした）で、時代の波にとっても敏感で、デビュー作でスキャンダルなほどの成功を収め、40年以上のキャリアを積みました。誰が何と言おうと彼はアーティストで、大量の消費を狙った作品の裏に、独特の登場人物によって彼の作品だとわかる世界を作っていました。当時の批評家は、彼の描く登場人物とアクションの展開を左右する宿命、すなわち、うまく仕組まれた陰謀を暴く小さな砂粒があると強調しました。しかしながら、単なる貪欲以外の理由を持ったこの小さな砂粒の発端に関してはふれませんでした。チェイスの推理小説が、ボワロー&ナルスジャックのいう典型的な「読ませる機械」（同じナルスジャックが定義した「はったり」ではなく）だとしたら、その歯車は、我々が想像するより人間的な動機によって動かされています。"Make the Corpse Walk"（『死体を歩かせろ』）（1945）の中で、恐るべき口先の策謀を失敗させるのは、スーザン・ヴェデーの勇気と、ボスである億万長者への運転手ジョーの忠実さです。"The Sucker Punch"（『予想外のパンチ』）（1954）の中で無節操なチャド・ウィンターズが、一儲けした後アメリカを立ち損ねるのは、彼の彼女が裏切るからです。"Not My Thing"（『俺には関係ない』）（1983）で、ジャミソン夫人を夫によって仕組まれた恐ろしい陰謀から救うのは、若いベトナム人、ングの愛情です。『蘭の肉体』（1941）に出てくる、病的に乱暴なキャロル・ブランディッシュでさえ、精神病院から逃げた際に、稀な心の優しい人々の助けによって、螺旋状の運命から抜け出すのです。また、チェイス作品の中でも特に冷酷な登場人物達は、ただサディスティックなだけではありません。"Make the Corpse Walk"（『死体を歩かせろ』）に出てくる恐ろしいクレオル、セリを見て下さい。確かに野心的で何でもやりかねない人物ですが、出身地のハイチと、平凡で人種差別的なイギリスで居場所を見つけないという欲望の狭間にいます（このジレンマのせいで命を落とすことになります）。

このような例はたくさんあります。全例が、チェイス作品の登場人物を墮落させたり救ったりし、筋を進めるのは、お金や貪欲ではなく、悲劇的本質を持った人間的感情だと示します。チェイス作品に良く出てくる、マフィア、怪しげな経営者、無免許の医者、サディスティックな殺し屋、ずうずうしい仲介者達の獣性が、"Trusted Like the Fox"（『狐のように信頼されている』）の作者の名声を築き上げました。しかし、彼のオリジナリティは、この獣性がひどいめにあわせたり、励ましたりする「人間的要因」を絶対に忘れないことです。不健全なセンセーショナルリズムから離れ、グレアム・グリーンも否認しなかったであろう心配事にふれましょう¹¹。チェイス作品は、ただ商業的進展の面で一貫しているではありません。作品の主題と、人間的、あまりにも人間的な動機のために裏切ってしまう（グリーンの世界と同様、チェイスの世界にも裏切りはつきまといます）無法な世界の描写によって一貫しています。

チェイス作品は繰り返しが多いと言われますが、それは典型的な間違いで、彼の作品を良く知らない証拠です。チェイスの全作品をまとめて見ると、奇妙なことに、マンシエットが尊大な口調で話していた「5つか6つの不変な形式」が複雑になってきます。既に見た通り、登場人物達は、互換できない様々な「典型」を構成します¹²。私も、（他の評論家よりも正確に）概略するために、チェイスの作品を、以下の3つの時代に分けます。

¹¹ 当たり前です！

¹² しかもこれらの「典型的登場人物」は、チェイス作品だと読者がわかるように、出発点として使われているだけです。その後、チェイスは彼らを自由に操ります。例えば、全権力をもった億万長者の例です。"Make the Corpse Walk"（『死体を歩かせろ』）（1945）のニコニコした、いかれた大富豪、ケスター・ウェイドマンと、『殺人は血であがなえ』（1957）に出てくる、娘のためなら手段を選ばない冷血なクリーデ

第1時代、1939年～1955年

英国人作家は、一番極端な面も含めたハードボイルド小説の全面を探求しました。『とむらいは俺がする』（1953）に出てくる大量の死体や、"Twelve Chinks and a Woman"（『12人の中国人と1人の女』）（1940）のフェナー探偵が悪人の腹を素手でえぐったり、殺し屋のペコが野性的に「もう少し！もう少し！」と叫びながら一人の男の首を締めたりする乱闘シーンがその証拠です。この頃のチェイスは、当時の流行を適用しています。それは、いかにもアメリカ風な雰囲気の中で、あちこちに野蛮さを描くことです。しかも、『ミス・ブランディッシュの蘭』の後、読者はこのような獣性を彼の作品に求めていました。ジェームズ・エルロイの作品を知っている現代の読者は、このような残虐行為を笑うでしょう。しかし、このような徴候と同時に、1940年からチェイスは暴力に距離を置くようになり、70年代のモダンな推理小説家達が羨むような暗示的な暴力シーンが出てきます。それは"Lady, Here's Your Wreath"（『レディ、これがあなたの花輪です』）（1940）から始まります。この本の語り手は、裸の女性死体（彼に責任を負わせようとして誰かが彼の家に置いたものです）を、友達のアッキーの助けを得て、始末しようとしています。しかしこの不気味なシーンは、退廃的な状況とは裏腹にユーモアを持って描かれています。まずは、死体を足の先から頭のとっぺんまで覆わなければなりません。（『彼女が立ってくれば、仕事が楽になるのに』等という台詞が出てきます。）そのためには、脚、腕などを持ち上げ、座らせなければなりません。チェイスはこのシーンを、恐ろしい行為には似合わない、驚くべき滑稽さで描いています。読者に、二人の男が人形（巨大な人形）で遊んでいるような印象を与えます¹³。それだけではありません。この死体を落とさずに車まで運び、通行人や警察官の注意を引かないためにきちんと座らせ、床に落ちないように注意し、警察官に止められる時は彼女を生きているかのように動かし、しゃべらせるために腹話術までやらなくてはなりません！また、チェイスは死体の運搬中に、死体の硬直さを使って、シーンをますます難しくします。このように、たった一つの章の中に、息をのませるサスペンス、ひどく病的な強迫観念、荒廃的なブラックユーモアを見せるのです！この直後に、最初から最後まで尋常でない"Miss Shumway Waves a Wand"（『ミス・シャムウェイが魔法の杖をふる』）（1943）で、チェイスがエスカレートするのも無理はありません。成功する形式を創る作家と言われ、最も正統なハードボイルド小説が染み付いているように見える彼がこのような素晴らしい多様性を持っていることも、驚くべき事ではありません。1944年には、実は一度も行っていないと言っていたこのアメリカを使った作品と平行して、幾つかの作品の舞台をイギリスに設定するようになります。これらの作品は、詐欺行為にロンドンの景色がはまっているからだけでなく、"More Deadly Than the Male"（『男性よりも致命的』）（1944）や"Trusted Like the Fox"（『狐のように信頼されている』）（1948）では、邪悪さと悲劇の最高峰に達するため、チェイスの最良の作品と言えるでしょう。

いと、裏切り者には容赦ない小さな男、"Believe This... You'll Believe Anything"（『これ信じて下さい。何でも信じるようになるでしょう。』）（1974）のヴィダルの間には、金銭的富以外には何の共通点もありません。"The Joker in the Pack"（『ジョーカーを手に入れた』）（1975）に出てくるサディスティックなヘルマン・ロルフと、"So What Happens to Me?"（『自分に何が起きているのか？』）（1974）に出てくる同じく恐るべきレーン・エセックスの間にも、何も共感するものはありません。皆容姿的にも心理的にも似ておらず、筋の中で同じような経歴をたどることもありません。そのため、チェイス作品の連続性は、見た目だけで、バルザック作品でもそうですが、作者の文学的世界を統一するのに役立つだけなのです。

¹³ 同様のアイデアが、ピーター・ローランの1984年の作品、"Jacqui"（『ジャッキー』）で使われ、小説の最初から最後まで登場します。

第2時代

1954年頃、チェイスは、全てを語らせ、飽きてしまったハードボイルド小説を決定的に逸脱し、どんどん様々なジャンルに挑戦します。既に見て来たように、彼は臨床医学的な暴力描写と同様に効果的なブラックユーモアや不気味さを取り入れて、型を破ってきました。1954年に、エレガントなドン・ミックレムや不可能なミッションを得意とするマーク・ガーランドのような登場人物を用いて、冒険物のスリラーやスパイ小説に挑戦し、新しい一歩を踏み出します。それと平行して、背景も英語圏だけではなく、国際的になっていきます。『ヴェニスを見て死ぬ』（1954）はイタリアで、ガーランドの冒険は東ヨーロッパとアフリカで、また『カメラマン ケイド』（1966）の中で写真家ケイドが運命に出会うのは、スイスのスキー場です。他の報酬目当ての登場人物は、実入りのいいミッションを求めてアジアに行き、『ミス・クォンの蓮華』（1960）の中ではベトナムに、"A Coffin from Hong Kong"（『香港からの棺』）（1961）では香港に赴きます。いつも出不精だと言っていたチェイスの作品にこのようなバラエティーにとんだ背景が出て来て、彼がそれをもっともらしく描く器量があることに驚きます。実はたくさん旅行をしていたのでしょうか。それと平行して、犯罪捜査を扱った物語を書き続けますが、文体が大きく変化しません。状況の中のバロック調、ハードボイルド小説特有の比較や比喩¹⁴は消え、少しの言葉で儉約的かつ冷淡な構成が現れます。彼の誹謗者達が、この時期チェイスが自分の才能を合理的に利用する方法をみつけ、特定の読者達を得るためにそれを繰り返したと考えても仕方が無いでしょう。その可能性は高く、事実でしょう。しかし、それはチェイスの世界が、サディズム、セックス、密猟を併せた推理小説だと単純化出来ない証拠でもあります。逆に、彼の世界は進化し、その進化が正統なハードボイルド小説の境界まで行く（もしくは、先ほど見たように境界を越えてしまう）からといって、悪いものだとは限りません。

第3にして最後の時代

60年代後半に始まります。チェイスは成功のすべての切り札を握っており、一見、物語の語り手としての優れた技量に関する心配しかしていないようです。当時の評論家達は、一般的に、この時期からチェイスが様々なジャンルの中に迷い始めると言います。確かに、彼の全作品が店頭に並んでいます。古典的な推理小説、スパイ小説、冒険物スリラー（例えば、1969年に発行された"The Vulture Is a Patient Bird"（『秃鷹は辛抱強い鳥』））、さらに警察小説（例えば、フロリダの億万長者達の最後の巣窟かつ様々な取引のかなめである避暑地のパラダイス・シティにおける警察官トム・レプスキーとその班の調査）まであります。実際には、この時期に彼の才能が頂点に達しただけでなく、複雑な主題を把握しています。全作品の中で、チェイスの強迫観念である裏切りが、純粹で単純な（お金や女性への）渴望によって、又は登場人物の人間性の過度によって生まれ、善から悪が現れるのです¹⁵。そして、第1、第2時代と比べて、成功作と駄作の数が変わらないことを強調しなければなりません。初期のチェイス作品を高く評価し、その後彼が変わってしまった

¹⁴ 比較や比喩は、推理小説が文学的みでくれの良さを得ることで、高潔な文学になろうと試みた跡です。レイモンド・チャンドラーが最初に移植を試み、多数の作家が彼を追いました。チェイスでさえ、"Lay Her among the Lilies"（『彼女を百合の中に寝かせなさい』）（1940）でシーン全体（精神病院に入れられた探偵は『さらば愛しき女よ』への敬意を表しています）だけでなく、変わった隠喩でチャンドラーの文体にオマージュを捧げています。「暖炉の近くに座っている老女のように、事業に動きが無かった」、「コンクリートを壊すほど強いウィスキー」等です。

¹⁵ この点に関して、"Lady, Here's Your Wreath"（『レディ、これがあなたの花輪です』）を再度見てみましょう。語り手が、美しいマルディ・ジャクソンを守るためにどのような危険にも勇敢に立ち向かい、最後には、幸せを掴む目前に彼女が殺人者だと知るのは、ハッピーエンドから一転し、悲劇となります。チェイスはこのテーマを後年の作品、"Have a Change of Scene"（『シーンを変更しろ』）（1973）でも扱います。

ことを後悔する傾向にあります。しかし実際には、当時のチェイスの全ての過度を含んだ、盗まれた死体に関する奇抜な物語、"Make the Corpse Walk"（『死体を歩かせろ』）（1945）と、だいぶ後に書かれた、アメリカの組織化され、現代化されたマフィアに関する明晰で冷淡な描写、"Knock, Knock! Who's There?"（『トントン！誰かいますか？』）（1973）というすっかり異なった2つの作品に、レベルの違いはありません¹⁶。本が変わっても、背景が変わっても、いつも同じ負け犬（"Make the Corpse Walk"（『死体を歩かせろ』）のシーズン・ヴェダー、"Knock, Knock! Who's There?"（『トントン！誰かいますか？』）のジョニー・ビアンダ）が日の当たる場所を求めて争い、いつも同じ権力者が彼らを邪魔する者を押しつぶし（又は押しつぶさせ）、いつも同じ冷淡で描写的なスタイルで、いつも同じ容赦ない筋の展開で、いつも同じ幻想を失ったビジョンなのです。世界は大きな落とし穴で、そこではどんどん巧妙になっていく罠を避け、その果てに罠に落ちるしかありません。チェイス自称のデカダンスはよく嘲弄されましたが、それも聞き飽きました。むしろ成功した変革だととらえるべきです。ハードボイルド小説の一番派手な面から発ち、その繊細さを作品に組み込んだ後、それを超越するのです。特に、彼の世界を拡大しながらも、歪めることなく、迷うこともないのです。このような無謀な行為を成功させたと自慢出来る作家はそうそういません。

それでもチェイスは純粋な商業作家でしょうか。彼のように、一般的でない強迫観念やテーマを多数の読者に好奇心の対象として提供した作家は稀です。戦後、多くのフランス人作家が批評家達の叫びを無視して、架空のアメリカ人ペンネームを使って、チェイスの形式を応用したのは大正解です。（一番有名なケースはもちろんヴェルノン・シュリヴァンのペンネームで書いたボリス・ヴィアンです。）しかし、彼らはチェイスの形式を見つけることができず、それはチェイスの作品が、読者の好みにあわせて定期的に届けられる商品ではなく、オリジナルな一つの世界をなすパーツだということを示しています。初期の作品に見られたサディズムや残虐行為は、素人の読者が、もっとグローバルな世界と人間の置かれている状況から、理解出来た部分だけを即時に翻訳した結果でしかないのです（チェイス作品が、アメリカとイギリスを発ち、その無情な世界をイタリア、旧ソビエト、アフリカ等世界中に移し替えるには理由があります）。そのうえ、このサディズムは一番明白な翻訳でしかないのです。チェイスはヒューマニズムに忠実で、無情な人物を描くのは、形而上学的なその厳しさの裏側を追いつめるのが目的です。出口の無い世界に生まれた嫌悪感、生き残るために戦わねばならない苛酷さ、または逆にピラミッドの頂点に立ったときに、あらゆる手段を用いてその地位を守らなければならない恐ろしさ。それはただ作家の技術的な器用さではなく、最善と最悪の人間の感情が、この道徳心の無い世界を紡ぐのです。これらの感情はプラスであったり、マイナスであったり、時にはプラスとマイナスの両方であったりします。読者は、"Trusted Like the Fox"（『狐のように信頼されている』）（1948）に出てくる、紛れもない親ナチス派で、憎しみと心の痛みを抱きながら戦後を生き、誰にも愛着を持たないと知りながらも可哀想なグレースに愛着を持ち、彼女のために自己を犠牲にするカッシュマンをけして忘れないでしょう。この自分の愛の対象を辱め、最後には彼女を愛する、邪悪で倒錯した人物は、チェイスの世界像と男性像の症候を示しています。いくら自分の権力を見せつけ、全ての人に憎しみを叫んでも、あなたの存在を失わせる弱さであり、あなたの人間性をあらわにしながらあなたを救う、人間的

¹⁶ チェイスの全作品の中には、成功作と同数の駄作があります。その意味で、『とむらいは俺がする』（1952）は、"The Joker in the Pack"（『ジョーカーを手に入れた』）（1975）に劣りません。それでも『とむらいは俺がする』には、裏の意味を読んで楽しむ愛読者がいます。"The Joker in the Pack"（『ジョーカーを手に入れた』）も、ヘルガ・ロルフという、裕福で無情な女性で、疑い易く、彼女を信用する人々を裏切ることを恐れがちな、興味深い人物が登場します。

要因に必ず捕らえられるのです。これほど豊富でバリエーションにとんだ主題は、お金の食欲で才能を駄目にするような作家の仕事ではありません。チェイスは、推理小説が自分の言いたいことに最も適した構成を持っているとよくわかっていたのです。そして推理小説だけでは満たされなくなったときに、読者を失うこと無く、冒険小説やスパイ小説に向かったのです。すべてのジャンルにおいて彼ほどの才能を持って活躍した作家はいません。

4、結論として

本の展示会で、ある推理小説専門家とチェイスを話題にしたところ、彼は私にこう言いました。「あなたがやっていることはとても良いと思います。しかし、彼と同様才能のある現代作家にも興味を持つべきです。」以下のように答えるべきでした。「そうかもしれませんが、しかし、私の代わりに皆がやっています。」古本屋の知り合いも「他の人がうまくやってくれているなら、何故彼らと同じことをしなければならないのだ？」と言っていました。冗長性は現代の疫病です。推理小説においては、潮流ではなく、商業的成功を進歩と考えるため、当然の結果として、ジャンルの中ですでに行われたことに興味を失ってしまいます。しかし、推理小説作家が亡くなったからといって彼の作品まで金庫にしまい込むことはありません。特に、作品が重要で、一貫性を持ち、豊富で現代性を帯びたジェームズ・ハドリー・チェイスの作品であればなおさらです。チェイスの世界ほど生き生きとし、今日性を帯びたものはありません。（チャールズ・ウィリアムズ、デイ・キーン、ロス・マクドナルド、ハリー・ウィットントン、その他数多くの作家達の世界と比べてもです。）我々は、いつかフランスの批評家と大学の研究者が彼の重大さに気付き、今度こそしっかりと注意を払ってくれることを望んでいます。そして、出版社が大量に再版することを諦めていません。しかしながら急がなければなりません。推理小説の古典作家は多くないため、チェイス作品のような大作を無視することは出来ません。作者の人物像が良くわからないものの、彼の作品がジャンルの進化に重要な役割を果たしたことに間違いはありません。彼が推理小説に悲劇を取り入れただけでなく¹⁷、悲劇が基本原則となり、社会的状況の告発や心理描写よりも小説の存在を正当化するようになりました。チェイスの後に、忠誠と裏切りの間で引き裂かれることが無く、悲劇につきものの不運も形而上的な背景（大まかに描かれることもありますが、否定出来ません）もない推理小説を書くことは不可能になり、暴力は悲劇の中で最も目に見える現象でしかなくなりました。この作者の作品の役割と重要さが認められない限り、このジャンルの見解は不完全で誤っているといえるでしょう。

ジュリアン・デュプレ
リヨン、マルセイユにて、2011年11月30日

¹⁷確かに、チェイスの前に悲劇を取り入れた先駆者がいます。ジェームズ・マラハン・ケインが、チェイスも『あぶく銭は身につかない』で真似た、有名な『郵便配達は二度ベルを鳴らす』（1934）で取り入れました。しかしその後すぐにケインは登場人物の現実的観察に興味を持ち、推理小説の構成から離れ、様々な社会的、職業的背景の描写をするようになりました。そのため、ケインと純粋な推理小説との間にはほとんど接点がなく、彼はアメリカの一般小説の分野で活躍したと言えます。